

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0689 ◆◆◆

22/06/01

【 巻き返し期待の6月相場、スタートダッシュに注目か 】

昨日終了した5月のドル/円相場は、月間変動幅 4.99 円。それなりに大きな変動を記録したものの、3月に 10.45 円、4月 9.58 円一動き、事前の期待値が大きかったことからするとやや物足りず、むしろ期待外れに終わったと言えるかもしれない。

さて、そんな5月相場を踏まえての足もと6月相場だが、経験則的には「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえるだけに、スタートダッシュが非常に大事というイメージだ。また、月の半ばに予定されている米FOMC前後までに動かなければ、今年6月相場の動意は期待できないことになる気もしている。

◎経験則からは「ドル安」有利との見方も、欧州情勢への見極め重要

今回の当レポートでは、月初恒例となっている過去の経験則から見た当月の月間見通しを報じてみたい。まずは恒例となっている月間の星取表から見てみると、6月ドル/円相場の勝敗は1990年以降昨年までの32年間で18勝14敗だった。若干ドル高有利ではあるが、勝率で6割にも達しておらず、互角に近い内容で目立った特徴とは言えないようだ。

しかし、過去の6月相場には興味深いポイントが別途2つある。うちひとつは、「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえること。「動く」事例を挙げれば、1ヶ月のあいだに13円以上も動いた1998年(高値146.75円、安値133.60円)になるだろうし、後者の「動かない」事例はと言うと月間変動率がわずか1.80円にとどまった2011年や同1.56円の2014年、そして昨年(1.94円)年間順位は11位が挙げられよう。

今年がどちらになるのか、正直なところ「神のみぞ知るところ」。個人的には期待外れに終わったと言えない5月の反動から巻き返しを期待したいところだが、果てさて如何なる動きをたどるのだろうか。

一方、6月相場におけるもうひとつのポイントは、「一度方向性が示されると、そのパターンが続く傾向がうかがえる」こと。事実、2000年以降でみてみると、2008年までの9年間で8回が「5月相場と同じ方向」に動いていたのだが、それ以降、2009年以降2018年までの10年では9回が「逆方向」に動いていた。翻って2019年から昨2021年までは3年連続で「順張り」。5月と6月が再び「同じ方向」へと動いている。2000-08年に見られたパターンに回帰している可能性もあり、だとすると今年は「4年目の順張り」か。5月相場同様に調整の動きから、「ドル安有利」ということになるのかもしれない。

最後に、6月を「アニバーサリー」の観点、過去の出来事・ニュースなどで見てみると、なかなか興味深いことが幾つかうかがえる。その最たるものは「英国を含めた欧州に関し、重要な出来事が起こりやすい」ということだろうか。

一例を挙げると、「欧州通貨制度・EMSを再調整(1982年)」、「デンマークでマーストリヒト条約批准を否決(1992年)」、「フランスに続きオランダもEU憲法批准せず(2005年)」、「アイルランドがリスボン条約の国民投票を否決(2008年)」、「ECBが初のマイナス金利を導入(2015年)」、「英国が国民投票でEU離脱を決定(2016年)」一などとなる。

もちろん、毎年確実に起こるものではないことは承知しているものの、折しも欧州地域を巻き込む格好でロシアのウクライナ侵攻が現実のものとなっているだけでなく戦術核の使用懸念。そして、スウェーデンなどのNATO加盟をめぐる軍事面を含めた圧力を強め、紛争地域の拡大さえも懸念されている。広義の欧州情勢は引き続き予断を許さない状況にあると言えそうだ。

また先週もレポートしたように、ラガルド総裁自身が利上げに言及したこともあり、ECBの金利引き上げ観測がそこそこで声高に取り沙汰されるなか、来週9日にECB理事会が実施される予定となっている。さすがに9日に利上げが決定されることはなさそうだが、7月以降に向けてどんな議論がなされたのかを見極めるうえでは非常に重要な会合で、場合によっては乱高下などを引き起こす可能性を否定できないだろう。6月は、材料的にも欧州の動きにより要注意との見方も根強い。(了)

